

---

# 僕と君で語る事

荻野斎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕と君で語る事

### 【Nコード】

N7828Y

### 【作者名】

荻野斎

### 【あらすじ】

桜の散る季節とでも言えばロマンチックなのだろうが、この話は全くロマンチックではない。全く持って残酷で、全く持って傑作で、全く持って取り返しのつかない話なのだ。だから始めよう。僕とあいつで描く一つの物語を。

## 初ノ語り・ボクノコエ（前書き）

どうも、死にかけている男です。よろしければ読んでください。

## 初ノ語り・ボクノコエ

悲しい話がある。

多分それは、僕とあいつが出会わなければ始まる事も無い話だったんだろう。始まる事も無かったし、始まってしまった今でも、始まるべきではなかったとしか言う事が出来ない。

どうして出会ってしまったのか。

どうして出会わなければならなかったのか。

どうしても出会わなければならなかったんだろう。

あいつとの出会いは偶然でもなく必然、当たり前前の事だったのだ。美徳的ではなく悪徳的で。

平穩ではなく不穩で。

優良ではなく劣悪で。

有意義ではなく無意義で。

自立的ではなく依存的で。

刹那ではなく永劫で。

正気ではなく狂気で。

正常でなく異常だった。

それは、言うまでも無い事なのだろう。

僕とあいつで綴る、この滑稽な物語は、一生終わる事も無く永遠に続いていく。

きつと、そういう事なのだろう。

だから始めようじゃないか。

あの日は確か、五月の上旬。桜が散り始めるにちょうど良い季節だった。

## 壱ノ語り・ボクトオウレイ（前書き）

どうも。納豆を食べたら、その納豆の賞味期限が切れている事に気が付いた奴です。前回の前書きと、ここで繋がるわけです。よろしければ読んでください。

## 壱ノ語り - ボクトオウレイ

終わり良ければすべて良し。 - シェイクスピア

シェイクスピアも終わり良ければすべて良しなんて言っただけで、僕からすれば終わらない場合はどうなるんですか、と質問してみた気分だ。

あの日から僕達は何一つ進んでいなくて、終わりなんて影も見えない。

そんな僕達は、一体どうすれば良い終わりを迎える事が出来るのだろうか。とかシェイクスピアに質問したなら、きつと『そんな事は知りませんねえ』とでも言われてあしらわれるのだろう。

だからどうって事はないんだけど、僕が思うのはシェイクスピアも終わりが有るような事しかしてないんだなあ、という感想だけである。

それでも僕はシェイクスピアのような偉人を馬鹿にする気など毛ほども無く、むしろ数々の名言を残し、数々の名作を作り上げた彼にはもつと長生きしてほしかった。長生きってのは、一世紀以上って事だけだ。

でもそう考えると、さすがにシェイクスピアも一世紀以上も生きていたら話を書くのに飽きたりネタに尽きたりして、自己嫌悪に陥る可能性も否めないなあ。

とか、思ったりしたけれど、これは語る必要のない事だ。

語る必要も無いし、語るなんておこがましい事なのだろう。

なんて事を、僕こと、桜磨<sup>おつまうて</sup>刀次はハムレットを読みながら思うのだった。

「シェイクスピア四大悲劇とは良く言ったものだよ。僕の人生の方がよっぽど悲劇的だ」

『かっかっか。そうに違いないのう。まあ、お主ぐらいの悲劇的な

人生を歩んだ奴は少ないがのう、歩まなかった奴がいなかったわけではないぞ。だがしかしお主はすごいもの。大抵、お主のような人生を歩んだ奴は、気でも狂って終いには自害の道を選ぶがのう」

妙に爺口調なのは僕の守護霊、桜零。<sup>おうれい</sup>いや、こいつは悪霊とでも言うべきなのか。僕の運命を狂わせたという点では悪霊なのだろうけど、これでも一応僕を守ってくれているのだから守護霊と言うべきなのだろう。

「はあ。なんでそういう、僕が鬱になるようなことばかり言うんだよお前は。それじゃあまるで僕が自殺してしまうかのような言い方じゃないか」

『そう言っただんじやよ。僕としては生きていて欲しいのじやが、それ無理な話じやろう。人間は一人では生きれぬ生物と聞くからのう。精々持って一年程度じやろう』

「馬鹿言え。全部犠牲にしてここまで来たんだ。そう簡単に死んでたまるか」

そうだ。何もかも犠牲にしてきた。

友人も、家族も、恋人も、全てを犠牲にした。その対価で、今僕は生きている。そう簡単に死んでたまるものか。

それに、僕は一人ではない。

「お前もいるしな。良い話相手だよ、桜零は。結構人間の事知ってるしな。話すだけで気が紛れるってのは本当にある事らしい」

『ふん。僕が仲間になったとも思っておるのか？勘違いするなよ。僕は僕のためにしか行動しない。お主が役に立たぬと思っただけで捨てるからの』

「捨てられないんだろ。もう僕達はそういう風になっちまったんだから」

『そうじやよ。だから切って捨てられても良いぐらいの覚悟で、この先僕と生きていけと、そう言っておるんじや。僕は僕、お主はお主』

「僕はお主、お主は僕、だろ？分かってるさ、大丈夫。お前は僕を

恨み、僕はお前恨む。お前は僕を護り、僕はお前を護る。それだけの話なんだろ」

桜零は、『分かってるなら良い』とだけ言つて、僕の体に戻った。桜零は守護霊ではある故、普段は人目につかないよう僕の体に身を隠しているが、実態は人型の零なので僕と話す時のみだけ姿を現す。

なんでも、守護霊に限らず、そういう奴はあまり人に見られるとその能力を失うらしい。

人に姿を見られるという事は存在を認識されるという事と同じで、それは霊にとつては危機だとかなんとか。

まあ姿を戻したのはそれだけが理由ではないのだろう。

なぜなら、僕達の目的地に辿り着いたのだから。

僕はインターホンを押す。

『は、はい。ど、ど、どなたでしょうか』

インターホン越しに聞こえてくる怯えている声。これは相当末期だな、と僕は思いながらこう呟く。

「どうもお、心配いりませんよ。通りすがりの除霊師です。金は一切かかりません。かかるのは――」

と、ここで僕は口を紡ぐ。

この台詞はどうも苦手だ。人を脅かす様な口調に、なってしまうんだよなあ。だがしかし、言わない訳にもいかなんだろう。これを言わなければ、僕達の仕事は成立しないのだから。

「貴方の魂を、ほんの少しいただくだけです」

僕が全てを犠牲にして得た力は、除霊の力。

ある霊を殺すための、僕の力だ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7828y/>

---

僕と君で語る事

2011年11月23日21時45分発行